

---

# インフィニット・ストラトス ~忘れられた者ノ散華~

リアルではおぜうタイプ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 〈忘れられた者ノ散華〉

### 【Nコード】

N6200U

### 【作者名】

リアルではおせうタイプ

### 【あらすじ】

現在より十数年前。博麗霊夢が博麗の巫女を就任する前。博麗霊夢より先代の巫女は、霊夢が就任したと同時に忘れられた。忘れられた楽園の幻想郷で忘れられたモノはどこへ行きつくのか……最初にたどり着いた地は、ある兵器によって歪められた世界だった。

注：この小説はMUGEN、ニコニコ的なネタが存在します。いろいろヤバいんで気を付けてくださいね。

## 一 発目 忘レラレタ巫女（前書き）

始まりはクラス代表戦。ある動画を見ていたら思いついた程度のネタなので連載でいいのかと思っただり。  
そんなことよりサインボードで介入やりたい…でも思いつかないがくんがくん

## 一 発目 忘レラレタ巫女

博麗の巫女は基本的に大妖怪、八雲紫によって幼き強力な子が連れられ、その時の巫女が教育を施し、そして子が一人前に成長したとき、その先代の巫女は消え、誰からも忘れられることになる。たとえ当代の博麗の巫女であっても。

その行方を知るのは、幻想郷全域の記憶を消した八雲紫のみ、とも言われる。

これは、忘れられた霊夢の先代、第12代博麗の巫女の世界単位の放浪の物語である。

霊夢によるスペルカードルールの制定、それにとまなう紅霧異変の発生。それより数年前、まだ霊夢が霊夢だったころ。

【博麗の巫女】は神社に一人、佇んでいた。

「……紫。いるのならちゃんと声をかけてください」

「あら、やっぱりバレちゃってたわね。」

【彼女】の背後に突然現れた女性。大妖怪、八雲紫。その表情は、複雑だった。

「霊夢…もうそろそろ博麗の巫女の名を継承してもいい年齢よ。」  
「つまり、私の存在ももうそろそろ忘れ去られてしまう、ということとですね。」

「…ごめんなさい、【博麗の巫女】。」

「いいのですよ。私は博麗の巫女として生きていただけですから。その博麗の巫女としての定めにより消え去るのならば、私はそれに従いましょう。」

紫も【博麗の巫女】も、日常と変わらない声質のまま話していたが、紫の表情は少しずつ哀しげになっていた。

紫にとっては12回目。娘のような博麗の巫女を自分の手で事実上殺すことになる。

大妖怪と謳われた彼女は、人一倍情が厚かったのだろうか。

「……まあ、少しだけ私事に身を染めたかった、という心残りはありませんがね。」

「……そう。じゃあ、今から貴女を消すことになるわ。」

「継承の儀、先代が消えてからでないと行えないのが不便ですね。

次代の博麗の巫女の生き様も観てはみたいです。」

「……まだ、遅らせられるのよ。」

「いえ、やっってください。紫。」

すっ、と紫の指があげられる。

それに連動し、【博麗の巫女】の上にスキマが展開された。

「さようなら、12代博麗の巫女……いいえ、【】。」

「さようなら、八雲紫。」

紫の指が振り下ろされると同時に、スキマが【博麗の巫女】を飲み込んだ。

このとき、確かに【彼女】は幻想郷から消え去った。

「……次の記憶修正はすぐ先。【あなた】のことを皆忘れ、皆靈夢を覚えるでしょう……」

一人残った紫は、空を見ながら一言一言呟く。

「幻想郷は全てを受け入れる。それはそれは哀しいことですわ……」

その紫の両頬には、二筋の涙が流れていた。

広い広いスキマの中。

【彼女】は何もせず、いや何もできず、ただ漂っていた。

（歴代の博麗の巫女が経験した継承……いつか霊夢も通る道。できれば道標でも残しておきたいのですが……無理ですね。）

その後1秒か、1分か、1時間か。時間の流れも一切わからず漂っていた【彼女】は、一筋の光を見つける。

（博麗の巫女の行き着く先……楽しみですね。）

その光に向き直った途端、【彼女】は意識を失った。

IS、正式名称インフィニット・ストラトス。女性にしか使えない、ということを除けば完璧な現代最強兵器。

専門的なことはともかく、ISという兵器があるならば、その使い手もいる。

その使い手を育てるのが、ここ、IS学園なのである。

時は五月。各年のクラス代表が戦い、その練度を見定めるためのもの。

その最初、世界唯一の男性IS操縦者、織斑一夏VS中国代表候補生、鳳鈴音の対戦中に謎のISが落下した。

やむなく、二人は謎のISと対峙することになり、【彼女】の物語はここから始まることになる。

〔博麗の巫女〕

光の眩しさに目をつぶり、収まったと感じ目を開けると、そこはここからの目測で地面から100間ぐらい空中だった。

「わー、空飛んでますよ私ー……」

などと現実逃避している間もなく、私は一気に地面に落下していく。なす術なし。

「スキマの中で死ぬと思っていたらまさかのこういう落下死って洒落にもなりませんよ……」

若干走馬灯まで見え隠れしてきた中、見えてきたのは円状の広場に、白い建物群。

どうやら私はあの広場まで落ちるようだ。

ここから見て3寸ほどとなると、相当広いのだろう。砂って結構落ちると痛いんだけどなー……

そんなこと考えている間にも、地面は間近に。  
円形状の広場の結界の穴を通り、さらに空中で一回転して落下の勢  
いを殺し、着地。

大分足が痺れたけど、死ななければ安い。痺れはすぐに回復する。

ゆっくりと立ち上がると、目に映ったのは三人の人型。

妖気は一切感じないことから、おそらく全員人間だろうが…妖気が  
存在しない妖怪もいるにはいる。

さて、本当に人間の場合迂闊に手は出せないが……

〈 サイドOUT 〉

突然空から降ってきた謎のIS、そしてさらに落ちてきた一人の女  
性。

一夏と鈴の頭は若干容量オーバー気味だった。

【ねえ一夏、今度は何よお〜!?!】

【俺が知るか。…ともかく、敵じゃないことだけを祈ろう。】

「…もし、そこのお二人。」

【女性】から、一夏たちに声がかかる。一夏たちは空を飛び、距離  
もあつたというのにその声はよく通っていた。

「人間とは思えぬ容姿、空を飛ぶ。どうやら人間ではないようです  
が……」

【何か突然人外認定されたんだけど!?!】

「危ない！逃げる！」

鈴が混乱する間、【女性】の前に落ちてきたISが、【彼女】に向けて向ける。

それに気づいた一夏が叫んだ途端、各指先からレーザーが放たれた。

「……………」

【彼女】は無言のまま、レーザーに飲まれる。その光景を見た一夏は愕然としていた。

「夢想天生……あまり使いたくはなかったのですが。」

途端、攻撃したISの背後に【彼女】が無傷で立っていた。

「あなたはどうかやら人害となるようだ……」

再度はレーザーを【彼女】に向けて。

しかしその場所に【彼女】はおらず、ISの懐、至近距離にいた。

「博麗拳術奥義。」

至近距離での震脚。その振動で一瞬動かなくなってからの胴体への正拳、さらに掌底。

その衝撃でぐらつきながらも尚反撃しようとするIS。

それを気にもせず胸部への裏拳。三回の重い一撃にISも完全に怯んだ。

「夢想封印。」

その隙を見逃さず、【彼女】はISに渾身のアッパーを打ち込んだ。

頑丈な妖怪だろうと何だろうと容赦なく砕く拳はISを大きく打ち上げる。

四連続の重い打撃に耐え切れず、打ち上げられたISは無残にも爆発した。

「ふう。とりあえずこれで安心」

ビービービー。

「動くな！」

突然現れた大量の人間（異形っぽい）達。

手に持っているものが何か【彼女】は知らないが、少なくとも敵意はむき出しである。

「…できないかあ。」

博麗の巫女は代々強運であり不運だと八雲紫は言っが、

この場合の【彼女】は強運（まだ生きている）であり不運（何か敵視されている）なのかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6200u/>

---

インフィニット・ストラトス ~忘レラレタ者ノ散華~

2011年7月5日07時02分発行